

中学校歴史的分野における問題解決学習の研究 —「問題」の設定と問題解決の方法に着目して—

大久保雄登

1.論文構成

序章 問題の所在と研究の目的

- 第1節 問題の所在
- 第2節 研究の目的と方法
- 第3節 論文の概要

第1章 歴史教育と問題解決学習

- 第1節 社会科における歴史教育
- 第2節 問題解決学習の内容と方法
- 第3節 歴史教育と問題解決学習の各時代における関係性

第2章 2000年代以前における歴史教育での問題解決学習の分析

- 第1節 1947～55年における実践
- 第2節 1956～76年における実践
- 第3節 1977～99年における実践
- 第4節 各実践の総括

第3章 現在の中学校における歴史教育での問題解決学習の分析

- 第1節 『社会科教育』における実践
- 第2節 『歴史地理教育』における実践
- 第3節 各実践の総括

第4章 問題解決学習を取り入れた中学校歴史的分野の授業構想

- 第1節 授業のねらいと意義
- 第2節 本時案の概要

終章 研究のまとめと今後の課題

- 第1節 研究のまとめ
- 第2節 今後の課題

2.問題の所在と研究の目的と方法

(1)問題の所在

本研究を進めるにあたって筆者は以下の2点を問題点として考える。

1点目として、従来行われてきた問題解決学習の形式が、歴史教育において対応していないということが挙げられる。元々問題解決学習は、社会や生活の中における「問題」について扱うものであった

め、実生活との関連を重視するものであった。しかし歴史教育では、主に過去の事象について扱う学問であるため、子どもたちが現在生活している中で抱く直接的な「問題」に結び付ける授業を行うには、授業の内容によっては難しいところがあるのは事実である。したがって、現実の直接的な「問題」を対象とする問題解決学習の形式では、現代の歴史教育で行うことが難しいとすることができる。

2点目として、歴史教育だからといって、授業における問題解決が過去のもので終始していることが挙げられる。もともと「歴史」を学ぶ意義というのは、過去と向き合い、現在を俯瞰してこれからの社会を生きていく力を育むことである。歴史を学んでも、それが今や未来に生きていかなければ、その学びは意味を持たない。すなわち、歴史を学んだうえで、それを現代の問題に結びつけて考えられるような能力を身に付けさせるためにも問題解決学習は重要であるのではないかと筆者は考える。

(2)研究の目的と方法

本研究の目的は、歴史教育で行われた問題解決学習の過去の実践を考察し、そこから従来の歴史教育における問題解決学習の課題を見つけ、新たに歴史教育に対応している問題解決学習の理論と方法を研究することである。研究の対象として、中学校の歴史授業の実践を扱うこととする。

本研究では2つの方法で進めていく。1つ目は、歴史教育と問題解決学習の関係性がどのように変化していったのかその変遷を整理することである。戦後に問題解決学習が始まって以来現代に至るまで、歴史教育の中で問題解決学習がどのように変化していき、現在のよう形になったのはなぜかを分析していく。2つ目は、歴史教育における問題解決学習の実践を、分析・考察することである。問題解決学習が変化していく中で、どのような実践を行ったのかを、初期社会科から現代までの歴史教育における問題解決学習を取り入れた実践を分析・考察していくことで明らかにしていくこととした。

3.研究の概要

(1)第1章

第1章第1節では社会科の中での歴史教育について整理し、歴史教育の類型化を行い、今回の研究で扱う実践の対象を明確にした。

	社会科歴史		歴史科
	補助的に歴史を学ぶ	歴史を主に学ぶ	
小学校	3年生	1)身近な市町村の様子	
	4年生	3)自然災害 4)県内の伝統や文化、先人の働き 5)県内の特色ある地域の様子	
	5年生	3)我が国の工業 5)我が国の自然環境	
	6年生	2)我が国の歴史上の事象について	
中学校	地理的分野	B ②世界の諸地域 C ③日本の諸地域	
	歴史的分野	A ①私たちが歴史 2)身近な地域の歴史	
	公民的分野	A ①私たちが生きる現代社会と文化の特色	
高等学校	日本史		内容の全て
	世界史		

学校教育での歴史教育は、社会科歴史と、歴史科の2つに大きく分けられるとされている。

「社会科歴史」に該当するのは、「歴史で教える」という考えのもと、教育目標を達成するための手段として歴史があると捉えられているものである。一方の「歴史科」に該当するのは、「歴史を教える」という考えのもと、知識の習得として歴史事実を教えることが目標とされているものである。本研究では、中学校の歴史教育が「社会科」の中で行われることから、「社会科歴史」の実践を分析していく。

第2節では、「問題」とは何を指すのか、「問題」を解決する意義は何なのかを明らかにし、問題解決学習の実践を分析する際の視点を提示した。

本研究での「問題」の定義は「課題を達成する過程において子どもたちが直面する障害」とした。また、実践の分析においての「問題」を「①学習者の生活経験、および学習者の体験から生じたものに由来する『問題』」、「②子どもの興味関心を重視し、教師が資料などを提示してそこから生じる『問題』」、「③教師から資料や教材を提示するが、学習者の経験や体験に関連し、そこから生じる『問題』」の3つに類型化を整理した。

「問題」を解決する意義は、「問題」を解決しようとする学習を行うことで、学習する目的が明確になり、やるべきことが目に見えて見通しを持ちやすくなることである。また、実践の分析においての問題解決の方法を「①調査や見学、体験活動のように実際に直接的な活動を通して資料を集め、それをもとに行動的に問題解決を試みるという方法」、「②教科書や資料集等の文献資料を用いた抽象的思考から情報を読み取り、考察して問題解決を試みるという方法」の2つに類型化を整理した。

第3節では、歴史教育における問題解決学習の性質や特徴を「1947～55年」、「1956～76年」、「1977

～99年」、「2000年代以降」の4つに分け、それぞれを時系列的に並べて分析し、それぞれの時期に行われていた歴史教育における問題解決学習の議論と学習指導要領との関連を整理し、なぜ当初行われていた問題解決学習が現代の歴史教育においてそぐわなくなったか、歴史教育と問題解決学習の関係がどのように変化していったかを時系列的にみて明らかにしていった。

	代表する研究者、授業者	問題解決学習の形式	歴史教育との関わり
1947～55年	上田薫、梅根悟、吉田定俊	子どもの社会生活上の問題解決	社会生活上の問題解決のための1つの手段
1956～76年	有田和正、長岡文雄	子どもにとって切実になる問題の提示	歴史を自分事として感じるための問題解決学習
1977～99年	谷川彰英	体験的な活動を取り入れた問題解決学習	当時のイメージをより鮮明にするための問題解決学習
	今谷順重	問題解決の人物学習	歴史上の人物への「共感」を通して、具体性を持たせる問題解決学習

問題解決学習はその時代の社会状況や、学校教育の実態を踏まえその時代に合わせた形に変化していった。歴史教育と問題解決学習の関わりでは、最初は問題解決学習としての目的を達成するために歴史を学んでいたが、分化社会科となり、中学校社会科で分野制が始まると、歴史を学ぶことそのものへと学習の中心が移行し、歴史的事実をより具体的により主体的に学ぶために問題解決学習を手段として行うというような変化をしていった。

	問題解決学習に関する記述の有無	記述されている文言	
		目標	内容
1952年版	○	社会における人々の生活、生活上の問題解決のしかたを理解することを通じて今日のわれわれの問題解決に資すること	今日起りつつある事件をクラスで討論させ、相互の意見を判定し、人間生活において歴史の重要性を認識し、問題の解決のために多くの資料や情報を集めて、その上で複雑な事情を分析し判断する
1955年版	○	日本や世界の現代の社会生活上の諸問題には、それぞれ歴史的な条件があることを理解させる	歴史学習は考えるためのものであるから、できるだけ総合的、発展的にものを考える力を養うようにするため、現在の社会生活上の問題の理解に資するよう指導内容を組織づけることが必要である
1958年版	○	現在のわれわれの社会生活が、どのような歴史的な事情のもとに形成されてきたかを理解させるとともに、身近なことから現代社会の当面する種々の問題を、歴史的に考えようとする態度を育てる	
1969年版			
1977年版			
1989年版			
1998年版	○		我が国の歴史について、関心ある主題を設定しまとめる作業的な活動を通して、時代の移り変わりに気付かせるとともに、歴史を学ぶ意欲を高める
2008年版	○		各時代の学習の初めにその特色の究明に向けた課題意識を育成した上で、他の時代との共通点や相違点に着目しながら、大観や表現の仕方を工夫して、各時代の特色をとりえさせるようにすること
2018年版	○	社会的な事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す	課題を追究したり解決したりする活動を通して、知識を身に付けることができるよう指導する

学習指導要領においては、1958年以降に系統学習が学校教育にも入ってきたことで、そこから問題解決学習の形式が変化している。その後、1998年度版の学習指導要領から再び歴史教育の中で問題解決学習を行うようになった。しかしそこでは、「問題解決学習」という言い方ではなく、課題解決的な学習・問題解決的な学習と言われるようになっていき、最初の問題解決学習とは本質が違ってきた。

(2)第2章

本章では、2000年以前の中学校歴史的分野の問題解決学習の実践を分析した。分析を行う際には量的・質的の2つから分析を行った。量的な分析とは、『社会科教育』と『歴史地理教育』の2誌で中学校歴史的分野の問題解決学習の実践数を分析し、その実践数を各年代で比較した。量的分析においては、各年代総じて実践数は全体の約10%前後と少なく、各年代による実践数の違いはあまり見られなかった。質的な分析とは、各年代でいくつか実践を取り上げ、第1章で提示した2つの視点から授業の分析を行った。

年代	実践名	設定した「問題」		
		①学習者の生活経験、および学習者の体験から生じたもの由来する「問題」	②子どもの興味関心を重視してそこから生じる「問題」	③教師から資料や教材を提示するが、学習者の経験や体験に関連し、そこから生じる「問題」
1945～1955年	水害と市政	○		
	紙芝居			○
1955～1976年	口分田から逃げ出した農民		○	
	第二次世界大戦下の国民生活		○	
1977～1999年	第二次世界大戦			○
	山城国一揆		○	
	地域社会と共に生きるー加倉井砂山と日新塾ー		○	
	聖徳太子の政治		○	
	幕府の滅亡と世直しへの願いー桜井常五郎の生き方を通じてー		○	

初期社会科の頃(1945～1955年)は学習者の生活経験や体験から生じる生徒にとって「切実な問題」を「問題」としている実践が多い。逆に、1955年以降になると、教師が教材、資料を提示し、そこから生じる「問題」を取り扱った実践が多く見られた。初期社会科の頃と比べると、生徒にとって社会や生活上の問題が見えづらくなってきたこともあり、生徒自身で「問題」を発見することが難しくなって、教師が生徒の興味関心を把握し、アプローチをかけることが必要になってきた。

歴史教育の中で生徒が「問題」を発見する方法として、地域の教材を取り入れている実践が多い。地元出身の人物や、地域の歴史などを教材として扱い、「問題」を発見しやすくして、そこから学ぶべき歴

史学習へとつなげていくというものである。

年代	実践名	問題解決の方法		問題解決の方法の詳細
		①調査や見学、体験活動のように実際に直接的な活動を通して資料を集め、それをもとに行動的に問題解決を試みるという方法	②教科書や資料集等の文献資料を用いた抽象的思考から情報を読み取り、考察して問題解決を試みるという方法	
1945～1955年	水害と市政	○	○	踏査などの現地調査、水防計画などの文献資料
	紙芝居		○	図書館や教師の所有している文献資料
1955～1976年	口分田から逃げ出した農民		○	教科書などの記述からの考察
	第二次世界大戦下の国民生活		○	文献資料と考察したことの意見交換
1977～1999年	第二次世界大戦	○	○	聞き取り調査、討論
	山城国一揆		○	資料、クラスの状況との比較
	地域社会と共に生きるー加倉井砂山と日新塾ー	○	○	文献資料、講演を聞く
	聖徳太子の政治	○	○	物語風の作品作り、資料
	幕府の滅亡と世直しへの願いー桜井常五郎の生き方を通じてー		○	文献資料

上記の実践のうち②の方法が全ての実践で用いていたことが分かる。資料が手に入りさえすれば、この方法は①の方法に比べると手間もかからず、正確な情報が手に入るため、この方法を用いやすい。文献資料と言っても、教科書についている記述で解決できる程度のことであれば、そもそも生徒は「問題」と感じない。切実性を持ってもらうためにも「簡単には解決できない」という壁を感じてこそ「問題」と感じるので、教師も問題意識を持ってもらうための教材や発問を工夫していく必要がある。

(3)第3章

本章では、2000年以降の中学校における歴史教育での問題解決学習の実践を分析した。前章に引き続き、ここでも量・質の両面から分析をした。

量的分析では、前章と同様の分析結果であった。質的分析では、前章と同様に2つの視点から分析を行った。2000年代以前の実践とは異なり、教師から提示して生じる「問題」が中心となっていることが分かった。しかもその「問題」は教科書に記述されている文章で解決できるようなものではなく、情報を集めた上で根拠をもとに考察しなくては解決できないものになっていた。問題解決の方法については、歴史的分野の学習では地方により、生活圏内で見学や調査などの方法を行うことができない場合があるため、文献資料を用いた方法がどこでも行えるため、こっちの方法が多かった。

現代では生徒にとって「問題」が見えづらくなっていくゆえ、生徒自身の経験や体験から「問題」を見いだすことが難しくなっている。まして歴史教育になると、生徒の体験や経験が授業に生かしづらい。そのため、歴史教育における問題解決学習を行うに

あたり、地域教材を用いることで「歴史」というイメージしづらいものでも生徒に興味関心を持たせることができ、地域にある遺跡や資料館、伝統芸能を通じて具体的に歴史を学ぶことができる。しかし、何でもかんでも地域教材を扱えば問題解決学習を行って上手くいくわけではない。多くの授業は教師から提示して「問題」を発見し、文献資料から情報を読み取り、考察するような方法を使っての学習になる。ため、教師の資料や導入での工夫で生徒の興味関心を引き出すことは現代で問題解決学習を行う場合には必要不可欠である。

(4)第4章

第4章第1節では、本研究で分かったことを踏まえ、問題解決学習を取り入れた中学校歴史的分野の授業を構想していくにあたり、教材・単元の設定をし、授業のねらいと意義について述べた。

今回の研究では、生徒に切実性を与えて「問題」を発見させるために、地域教材を扱い、目で見ることができるものから歴史的な内容に迫っていくことが有効であること、各地域により、扱える内容や教科書の内容との関連性などに偏りがあるため、地域ごとにどこの学習内容と関連付けるのかを工夫することが必要であることが明らかになった。これを踏まえ、筆者の地元である横手市の中学校での授業と仮定し、「後三年の合戦」を題材とした授業を構想した。後三年の合戦を題材とした理由は、横手市において今も後三年の合戦に関連する遺跡や資料館があるため、授業に活用しやすいことである。歴史の「問題」を発見する上で教科書や資料集等を使うよりも、実際に見て、触れてみることで「問題」が見えやすくなる。それゆえ、今回の授業は後三年の合戦を題材として、中学校歴史的分野の内容「B 近世までの日本とアジア」を想定し、奥州藤原氏と武士の広がり扱う授業構想を行った。

第2節では、構想した本時の概要を述べた。本時は「中世の日本」の単元8時間のうちの2~5時間目にあたる。最初の時間に「問題」を設定し、その後解決のための手段として、地域の後三年の合戦に関連する遺跡や資料館のフィールドワークを行い、調べた情報をもとに「問題」に迫るといったものとした。

本授業では、「なぜ奥州藤原氏は奥州で黄金文化を築くまでに繁栄したのか」という「問題」を設定する。本授業でこの「問題」を設定した理由は、3点ある。1点目は教科書や資料集等書かれてある記述だけで解決できる「問題」ではないこと。2点目は生徒に「問題」を発見させうるだけの資料がある

ということである。3点目は内容的なこと、質素な生活をしていた当時の社会状況と奥州藤原氏の黄金文化は真逆と言えるような状況であることに「なぜ」と生徒は強く感じると考えられたことである。

4.研究の成果と今後の課題

問題解決学習は、当初やられていた形式では段々やりづらくなっていった衰退した時もあったが、形を変えながらも戦後以降現代に至るまでやり続けられてきた。歴史教育との関わりでは、最初は問題解決学習としての目的を達成するために歴史を学んでいたが、分化社会科となり、中学校社会科で分野制が始まると、歴史を学ぶことそのものへと学習の中心が移行し、歴史的な事実をより具体的に主體的に学ぶために問題解決学習を手段として行うというような変化をしていった。歴史を具体的に学ぶ問題解決学習を行うにあたり、生徒に切実性を与えて「問題」を発見させるために、地域教材を扱い、地域的な目に見えることができるものから歴史的な内容に迫っていくことが有効であることが明らかになった。これは各地域により、扱える内容や教科書の内容との関連性などが偏ってしまうという点もあるため、万能な方法ではない。そのため、地域ごとにどこの学習内容と関連付けるのかを工夫することが必要である。

また、今後の課題として2点挙げる。1点目は、第2章と第3章で取り上げた実践に偏りがあった点である。初期社会科の実践など年代によって雑誌が手に入らないものがあったり、『考える子ども』が各時代で扱うことができなかつたりした。

2点目は、他校種や他の分野での歴史教育との比較が、今回の研究ではできなかったことである。小学校の社会科で行われている歴史教育や、中学校地理的分野、公民的分野の中で行われる歴史教育での問題解決学習はどのようになっているのかを分析することで、歴史教育での問題解決学習の実情をより明確に明らかにできるだろう。